

野澤和弘先生

松元瑞枝・言語聴覚士

5月10日には、乃木坂スクールでのご講演ありがとうございました。

当日、質問をさせて頂きました言語聴覚士の松元瑞枝です。お話をお聞きして、感じたこと考えたことを書かせて頂きます。

まず、「ステージ」という新聞を長年作り続けてこられたことに、敬意を感じました。

「ステージ」について存じ上げなかったのも、その日の夜に早速ネットで検索して、年間購読を申し込みました。そして、実践から学んでこられた、難しいことをやさしく書く方法についてのお話になるほどと思い、私も取り入れさせて頂きたいと思いました。さらに、一般新聞の紙面の一角に、こういうわかりやすい記事コーナーというのがあると良いなあ、と思いました。

次に、「アールブリュット」を見せて頂き、素晴らしいなと思いました。私は25年間の臨床後、現在は専門学校で言語聴覚士養成に携わっています。専門学校の学生達にネットで「アールブリュット」を見せて、障害の持つプラスの側面を伝えたいと思いました。

そして、コミュニケーションについての先生のパワポは、本当にわかりやすく納得いたしました。また取材についてのお話から、取材は、私たち言語聴覚士の臨床と大変よく似ていると思いました。

ただ、言語障害のある方は無意識の海に加えて、表現できない意識があり、その一部が言葉にできた意識になるところが異なると思います。ですので、先生の取材についてのスライドの「②意味づけされた意識を引き出す」ところが、私たち言語聴覚士(以下ST)の場合は『②表現できる意識をひきだす』ことになり、先生の「③意味づけされていない意識をことばにする」のところ、STは『③表現できない意識と一緒に考え、表現手段を工夫する』ということになるのではないかと考えました。

私はこうやって臨床をしてきたように思います。

最後に野澤先生達のつくられた条例のなかに「障害のある人の義務」が盛り込まれていることに、目を見開らかされました。ただ、STが対象とする言語障害のある人達は、ご自分の思いを表現し、伝えることが出来ないのが一番困るのです。当事者の声が世間を変える力があると思いますが、当事者が声を上げられないのです。ならば、言語障害のある人と身近に接してきた私たちSTが代弁するしかないのではないのでしょうか？

先生のお話を聞きながら、今までぼんやりと課題だと考えていた「言語障害のある方への情報の保障」という問題に取り組むことを、残りのST人生の目標にしたいと決心をしました。先生のように、具体的に行動を起こしたいと思います。困った時には、ご相談させていただいてもよろしいでしょうか？まずは、自分の出来そうなことから始めたいと思います。 ご講義どうも、ありがとうございました。